

大岡昇平集

現代の文学 25

現代の文学 = 25

大岡昇平集



俘虜記
野火
武蔵野夫人
花影
木宮心中

河出書房新社

現代の文学25 大岡昇平集

© 1966

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和41年4月1日 初版印刷
昭和41年4月8日 初版発行

定価 390円

著者 大岡昇平
発行者 河出朋久
印刷者 高橋武夫
装幀 原弘 (N.D.C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

製本・小高製本工業K・K

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

俘虜記……………三

野火……………七

武蔵野夫人……………一四

花影……………二七

来宮心中……………三五

年譜……………三五

解説……………小島信夫…三七

挿画 石橋和美
写真 三木淳

大岡昇平集

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

俘
虜
記

わがころのよくてころさぬにはあらず

歎異鈔

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜かひりとなつた。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四国の半分ほどの島である。軍事施設として見るべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つの要地に、名ばかりの警備駐屯ちゆうとんをおこなうのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部および西部の警備を担当した。中隊本部は私の属する一箇小隊とともに島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊は、それぞれ東南ブララカオ西北パルアンにあった。サンホセ、パルアン間、つまり、島の西海岸の全長をおおよそ五十里が開けはなたれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼らは攻撃して来なかつた。昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をもつ

てサンホセに上陸した。われわれはただちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブララカオ背後の高地で、同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はここには上がつていながつたが、小隊はサンホセの砲声を聞き、糧食無線機とともにあらかじめ退避をしていたのである。糧食はまだ豊富であり、まもなくわれわれと合流した付近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合わせ総員約二百名、三カ月以上を支え得るはずであつた。明けて一月二十四日米軍の襲撃をうけて四散するまで約四十日、われわれはここに露営した。

米機は終日頭上にあつたが。米軍はただちに追求しては来なかつた。「やつらは怠なまけ者だからこんなどこまでやつて来やしないさ。そっちが来なけりゃこちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだろう」とわれわれの自分の宿舎となるべき小屋がけ作業を指揮しながらある下士官がいったが、これはわれわれの希望のかなり端的な表現であつた。すなわち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、われわれが山中にじつとして選んだことが明白である以上、われわれが通過して、ここは最後までいわゆる「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。われわれのような孤立無援の小部隊にいだき得る唯一ひつの希望である。

しかし不幸にしてわれわれはやはり「行かない」わけ

にはいかなかった。やがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵偵察の命をうけ、たびたび十数名より成る斥候が組織され、十日あるは一週間、サンホセ付近の山中に潜伏して帰った。あるとき彼らは米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見はらす高地に移動して分哨となり、毎日彼らが望遠鏡で見た情況を大隊本部に打電した。彼らはしばしば数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつてわれわれがボートをあやつって魚を釣った湾内には、米内火艇が引っかいたような水脈を曳いて疾駆していた。

一月にはいり、大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼らの到着予定日には米軍が東海岸一帯に上陸しており、彼らを乗せた舟艇は以来行方不明であった。もっとも斬込隊はわれわれのあいだではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼らの到着はとりもなおさず、われわれの中から若干の決死隊を出し、嚮導せねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍にたいする百五十名の斬込隊の成果について、われわれは何の幻想も持っていなかった。

しかしわれわれはその後も無電命令により幾度かブラ

ラカオに出張し、あるいは到着しているかもしれない斬込隊を迎えに行つた。われわれは無人の民家をあらし、たまたま家財を取りにきた不運な住民を拉致して帰つた。こうしてわれわれは本意ながら、だんだん掃蕩される原因を作つていったのである。

こうした絶望的情況にあつても、われわれ兵士は比較的のんきであつた。われわれはことごとくその年召集され、三カ月の教育の後、前線に送られた補充兵で、経験の欠如から事態の重大さがピンと来なかつた。しかしくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を、毎日気に病んでいられるものでもない以上、こうした無知はむしろ天が与えた恩恵だつたといふこともできようか。われわれは大部分私のように三十を越していて、目前の事態から強いて早急な結論を求めようとはしなかつた。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかつた。気候はすでに乾季にはいつて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみ着のままの露営生活には手ごろな陽気である。糧食もさしあつて不自由なく、分隊ごとに疎開分宿したから軍紀もおのずからゆるんで、兵士をかたくるしい軍隊の日常の作法から解放した。われわれはキャンブにでも来たような気持で谷川の水で飯をたき、マニヤンと呼ばれる付近

の土民（これは海岸地方に住む一般比島人より色が黒い山地人で、戦争に無関心である）と馴れ、赤布、アルミ貨などを与えて、芋、バナナ、煙草などを獲た。われわれはときどき驚にくんだり、飼主を失った牛を射ってその肉を食べた。

しかし災厄は意外なほうからやって来た。マラリアである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの発生する島だそうである。しかし予防薬をとっていたためか、サンホセにいたるあいだは患者は二、三名を越えなかったが、山へはいるとき衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃されたとき、立って戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月のあいだには大体一日三人ずつ死んでいった。

病人はしずかに死んだ。彼らの急激な意気沮喪はいちじるしく、そののんきな日常と異様な対照を示していた。中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞った。彼は小屋に充満している病人を眺め、だまって戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路のひらいていたあいだに、しゃにむに北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻をもらした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部からめんどろな偵察の命令をうけ、結局

こうして病人がふえて動きがとれなくなったのである。下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を永久の安全地帯と見なす近視眼的前提がふくまれていた。かつてノモンハンの戦鬪を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかかる楽観的予測を抱懐し得たはずはない。

彼は幹部候補生あがりの若い中尉で、二十七歳であったが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その目その顔には現われていた。私は彼のからだにその僚友の死臭をかぐようにさえ思った。「警備隊は警備地区をもつてその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一ぺんの訓示をおこなっていたとは思わない。

彼は米軍に対してわれわれの現在地をとくに秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与え帰らしめた。彼の言動には一種のあきらめがあり、動作はいわば過度に緩慢であつて、ときどき歯のあいだから押しだすように弱く笑つた。犠牲者の笑いである。

彼は幾分すすんで死を求めたようである。サンホセ駐屯中おこなつた討伐戦で、彼はつねに先頭に立って戦つて、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請

を至上命令として自分に課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感ぜずにはいられない、あの心のやさしい指揮者の一人であった。彼らは一般にただ自己の死によってしか、その部下にたいする要求を正当化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃をうけたとき、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾をうけて、一番先に戦死した。おそらく本望だったろう。

一種の共感から私はこの若い将校をひそかに愛していた。私もまた私なりに、彼とはかなり違った意味においてであったけれど、自分の確実な死を見つめて生きていたからである。

私はすでに日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦いに引きずりこんだ軍部をにくんでいたが、私がこれまで彼らを阻止すべく何事も賭さなかつた以上、彼らによって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等におくこうした考え方に私はこっけいを感じたが、今無意味な死にかりだされてゆく自己の愚劣をわらわらないためにも、そう考える必要があつたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下のほうを動いてゆく玩具のような連絡船の赤や青の灯を

見ながら、奴隷のように死にむかつて讀みだされてゆく自分のみじめさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命をともしするまで」という観念に安住し、時局便乗の虚言者もむなしく談ずる敗戦主義者も一からげにわらっていたが、いざ輸送船に乗ってしまうと、たんなる「死」がどっかりと私の前に腰をおろして動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はいり、別れは実際つらかったが、それは現に私が輸送船上にいるという事実によって、確実に過ぎさつた。未来には死があるばかりであるが、われわれがそれについて表象し得るものは完全な虚無であり、そこに移るのも、今私がいやおうなく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることができらば、私に何の思ひわづらうことがあろう。私はくりかえしこう自分に言いかけた。しかし死の観念はたえず戻って、生活のあらゆる瞬間に私をおそつた。私はついにいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死をひかえて今私が生きている、それが問題なのだということを了解した。

死の観念はしかしこころよい観念である。比島の原色の朝やけ夕やけ、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。いたるところ死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を目でむさぼつた。私は死の前にこ

うした生の汎濫はんらんを見せてくれた運命に感謝した。山へはいってからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性の秩序が取ってかわったが、それも私にはますます美しく思われた。こうして自然のふところであえず増大してゆく快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思われた。

しかしいよいよ退路が遮断しゃだんされ、周囲で僚友がづぎづぎに死んでゆくのをみるにつれ、ふしぎな変化が私のなかで起った。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然おしのけられ、一脈の空想的な可能性をえがいて、それを追求する気になった。少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思われた。

明らかにこれは周囲に濃くなってきた死の影にたいする私の肉体の反作用であった。こうした異常な状態にあつて、肉体がわれわれをしておこなわしめるものはすこぶる現実的であるが、その考えさすものはつねに荒唐無稽かうとうむきである。

私には一人の仲間があつた。滋野しげのはある漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中、前線出動の可能性をわざと軍に影響をもつ父親に知らさず、みずから内

地にのこる手段をたち切っていた。彼の夢は前線の情況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦っていると判断し、「こんな戦場で死んじゃつまらない」と思ったといつた。

このことばは私にとって一種の天啓であつた。この死を無理にみずから選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞まごにすぎないことに私は突然思いあたつた。こんなへんぴな山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、「つまらない」ただそれだけなのである。

われわれは二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはこうである——いづれわれわれが米軍によつて現在地を追われるのは確実として、何とか敵中をくぐつて西海岸に出る。そして住民の帆船をぶんどり、季節風を利用して島伝いにボルネオにのがれる（このさい私が海水浴場でおぼえた帆走術が役立つはずであつた）。私はボルネオも安全とはいえないから、いつそ南支那海みなもろしなかいをつつ切つて仏印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善じぜんを選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつたばあい、われわれはふたたび山にこもり、草の根でも食べて休戦を待つのである。われわれは昔読んだ「ロビンソン・クルソー」の細目さいもを語りあい、土民に木から火をおこす方法を学んでおいた。

この計画は、いかにも空想的であるが、われわれは、その実現の可能性を少しもうたがわなかった。

われわれはくりかえし計画を検討し、日に三人だけか死んでゆくなかで、墓掘人足のように快活であった（われわれはじつさい墓穴を掘った）。われわれのもっとも身近な敵、マラリアにかかったばあいを考慮し、現在のこつた唯一の対抗法、つまり、あらかじめ体力をたくわえることに全力をあげた。われわれは病人ののこした粥（かゆ）を食べ、土に落ちた飯粒もひろって食べた。

われわれはこうして、あらゆるばあいにそなえて周到に計画していたにもかかわらず、ただわれわれがマラリアで発熱しているちようどそのとき、米軍がやって来るばあいに想到していなかった。

二人とも申しあわせたように一月十六日に発熱した。私は毎日四十度の熱がつづき、二日めに足が立たなくなり、三日めに舌がもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかったが、熱は三十九度以上出た。

最初の試煉（しけん）が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私のからだは強健ではなかったが、病にたいしては比較的抵抗力があるのを知っていた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫（くわ）した。熱のためすぐ下痢（げり）がはじまったのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これがそのときの私の考えであった）

いっさい食べないことにした。半月ぐらい食べずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯（たくわ）えてあると、私は自負していたのである。

衛生兵は山へはいつてから奇妙なマラリア療法を發明していた。つまりマラリア患者は水をのんではいけないというのである。私はそれまでの首従の習慣を一擲（いつてき）し、断固として反対した。あらゆる論拠をあげて、禁止の無意味なることを証明した。分隊長は怒って兵士が私のために水をくむことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待ってひそかに頼み、あるいは自分で十間ばかり離れた泉まで行って行って水筒に汲（く）んだ。

私は死がマラリア患者を急激におそうのに気がついていた。私はたえず自分のからだの状態を監視し、まだ死につつないのを確かめた。病人が死ぬ前に糞便（ふんべん）を失禁するのを見て、苦痛がはげしくなると、わざと戸口まではいだして小便をして見た。

このあいだに一人同じ分隊の兵士が死んだ。死体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であったから、比較的軽い病人が、土葬を手伝わねばならなかった。長らく発熱して少しくよくなったと思われた一人の兵士が、死人の装束を一町ばかり上の中隊本部まで返納（へんなく）やられた。帰って小屋にはいるとき、私は彼の顔が異様にゆがんでいるのを認めた。翌朝、彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱がさがり、夕方発病後はじめて少量の粥をとった。その時展望哨が米船三隻のブララカオ湾内に入るのを見たと伝えられた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかった。帰っても不機嫌に横になったきり何もいわなかった。われわれは通りすがりの兵士から、ただちに四名の斥候が出たということ聞いた。

翌朝目がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなって、ふしぎな気持ちで眺めたのをおぼえている。私は漠然とその払暁米軍が来るかなと考えていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかった。私は分隊長に「きょう米軍が来なかったところを見ると、僕たちは包囲されてるんじゃないでしょうか」といった。彼は「病人のくせになまいきいな」といった。

つぎの日は一月二十四日である。払暁また一組の将校斥候が出た。七時ごろ一人の兵士が帰って、一行は麓で襲撃され、将校は戦死したと伝えた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰って、病人は非戦闘員とともにサンホセ方面高地の分哨まで退避する、歩ける者は支度しろといった。そして彼自身も支度をはじめた（彼も少し前から病人と称していた）。

私もようやく歩いて便所へ行けるまで回復していたが、分哨まで十五キロの道は自信がなかった。その先またどれだけ歩かなければならないかしたるものではない。私はついに自分がここで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残った。滋野は行くつもりらしく支度をはじめた。私も外へ出て、何となく小屋のまわりを歩きながら、彼に改めて「おれは残るよ」といった。

彼も大分よくなっていた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。おれが助けてやるから一しょに行こう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一しょに行く気になった。私は分隊長に決心を変えたことを伝えた。彼はだまっていた。

各自押しだまって支度をした。別れのことばはかわされなかった。

出発のときになった。私が皆について歩きだそうとすると、分隊長が振りむいて、しかし私の顔を見ないようにながら「大岡、残るか」といった。私はとっさに私がいかに一行の足手まといになるべきか、私の状態が職業軍人の目にどううつるかを了解した。私は「残ります」と答え、銃をおろした。

滋野はなぜかこのとき先発して私の見えないところま

でのぼっていた。そのときの情況では彼を呼びかえず気はおこらなかつた。こうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいわずに別れてしまったのである。

この退避組は全部で六十名あまりになつたが、二キロばかり行つたところで襲撃され、ちりぢりになつた。米軍はこのときすでに完全にわれわれを包圍していたのである。滋野はその晩まで分隊長と一しょにいたが、翌朝落伍していたそうである（こういうことを私は後で私と同じ俘虜収容所に来たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士とともに一月ばかり山の中をさまよつた後比島人とらえられた。彼はその手に残っていた手榴弾を投げなかつた）。

残つた者のとるべき行動については、何の命令も与えられていなかつた。とにかく各自靴をはき、脚絆を巻き戦闘準備をして横になつた。

私はこのとき分隊で一番重い病人であつたから残るのは当然として、他の三人が出発した連中とくらべて、とくに悪い状態にあるとは見えなかつたのは意外であつた。

一人は衣川（えがわ）という大正の講壇批評家の息子で会社員であつた。彼はつねづね命令された最小限をおこなうというすこぶる消極的な勤務ぶりを示し、上官の受けはよくなかつた。衣川は珍しい姓であつたから、私はあるとき

彼に「君は衣川先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類じゃねえ」と囁んで吐きだすようにいつた。それは「親類じゃねえ、赤の他人だ」とは受けとれない妙な返事だつた。私は「息子だな」と感じたが、その返事が気にいらなかつたから追求しなかつた。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の発熱をしたとき、彼も足をいためて班内にいたが、飯盒に水をくんで来て、ていねいに私の頭をひやしてくれた。その看護には女のような奇妙なやさしさがあり、彼のふだんの人に馴れない態度とは似合わなかつた。私が前の質問をくりかえすと彼はすなおに次男だといひ、問はず語りに彼の父が震災で不慮の死をとげてから後の一家の歴史をこまごまと語つた。以来われわれは友人となつた。しかし彼は私と滋野の脱出計画を冷笑していた。

彼ははつきりしたマラリアの症状を示さず、仮病じゃないかという者もあつた。少なくとも出かけた滋野よりはるかにいい状態にあつたことは事実である。彼は口をまげて「行つたつて残つたつて同じことさ」といつた。彼は心はやさしいが、幾分自分をそまつにする男だつたようである。

他の一人は土木師であつた。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、しばしば上等兵の勤務をとつた。私は彼を阿諛者としてきらつていたが、山へはいつてもはや

序列も昇進も問題でなくなつた後も、依然としてよく働
き、すずんで重い物などかついだ。そしておそらくその
ため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの年
になつても、まだ人を見る目に誤りがあるのをひそかに
恥じた。彼は熱はもう下がつていたが、多分体が見かけ
以上に弱つていたのであらう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行く
とも残るともはつきり意志表示をせず、ただ皆が出かけ
た後で、見たら彼がそこにいたというにすぎない。彼は
べそをかいたような顔をして、脚絆も巻かずに壁に向い
て寝てしまつた。

時刻は残留者がだれも時計を持っていなかったので、
はつきりしたことはわからない。私は通りかかる兵士に
飯盒に水をくんで来てもらい、何度もそれを水筒に詰め
ようと思ひながら、億劫で止めたのをおぼえている。物
音はなかつた。兵士もだんだん通らなくなつた。

突然、谷の下のほうから三発のぶい発射音がきこえ、
少し間をおいて中隊本部のある山の上で、三発の澄んだ
はじけるような音がした。

小銃の音ではなかつた。私はそれまで迫撃砲の音を聞
いたことはなかつたが、なぜかこのときそれを迫撃砲と
きめてしまった。弾着を見るための試射の音であると思
われた。

皆起きあがつた。表情のない顔だつた。「来たらしい
——とにかく上まで行つて見ようか」と私はいつた。皆
「うん」と答えて身動きをはじめた。

私は飯盒の水を水筒に移そうとした。手がふるえて水
は外へこぼれた。私は「死ぬのには水はいらねえや」とつ
ぶやき、飯盒を遠く投げとばした。

私の友人はしばしば私が何事にも見切りがよすぎると
非難したが、私が今日生きて帰つてこんな文章を書いて
いられるのは、ひたすら、このときこの水をすてたとい
う一事にかかつている。

私はなるべく身がるに身をこしらえて外へ出た。弾入
れも一個しかつかなかつた。そのときの私の感じでは、
私の生命はその三十発を射ちつくすまではもたないの
である。

他の三人はまだ中でごそごそやつていた。私は中隊本
部まで一町の坂道をのぼれるかどうか自信がなかつた。
私は「先へ行くぜ」と声をかけて歩きだした。

「一しよに行かないのか」と衣川が不服そうにいつた。
私は「歩けるかどうかわかんないから先に行く。多分途
中で待てる」と言いつて、銃を杖に、狭いジグザグの
坂道を登りはじめた。これがこの連中の見おさめとなつ
た。なおも身ごしらえに手間どつていた彼らは、一人も
この米軍の砲撃正面となつた谷から出られなかつた。

私はふしぎに歩いて途中休みなしにのぼりきることができた。上ではみんな活発に動いていた。三人ぐらいつ隊伍を組み、緊張した顔をつらねて、無言で左右にすれちがっていた。私は稜線を越えたところにある一つの分隊小屋にはいって腰をおろした。二、三人の病兵が銃をだき、顔をゆがめて横たわっていた。

とたんに小屋は炸裂音に包まれた。私は反射的に小屋を出て弾の来る方角へ伏せた。今私がのぼってきた谷の方角である。炸裂音はつづいた。「前へ出ろ、前へ出ろ」という声がきこえた（このとき、私たちの位置から十メートル後方の衛兵所に弾が落ちて、一人の兵士が大腸骨をくだかれたのである）。私ははって前へにじり出た。炸裂音はなお前方ではげしくしていた。私は前進を中止した。「前へ出ろ」の聲はつづいた。

中隊長が出てきた。彼は背負った鉄兜の上から上衣を羽織り、せむしのような恰好をしていた。彼は「にぎやかでいいじゃないか」と笑いながら双眼鏡を持ちそえ、弾の来るほうへ、映画の画面を横切る人のように歩いて消えた。これが私が見た最後である。

二十人ばかりの兵がそこらに伏せていた。私は隣りの兵士と顔を見あわせた。熱病患者らしく青くふくれたその顔も笑っていた。

弾はまた一しきりはげしくなつて依然前方に落ちた。

それから止んだ。

「隊長殿がやられた」という声がし、「衛生兵」と呼ぶ声がつづいた（この衛生兵も後で収容所で会ったが、彼は中隊長の死体を見つけることができなかつたという）。先任軍曹が来て、「病人は谷におりろ」といった。私は今しがた休んだ小屋へ行つて病人をうながした。彼らは私が最初はいったときと同じ姿勢で寝ていた。そしてきこえるのかきこえないのか、身動きもしなかつた。

われわれは私がのぼってきた谷とは反対側の谷へ一列になつておりはじめた。病人でない者も皆おりた。私の前には先任軍曹が歩いていった。「隊長殿がやられた」という声が後ろでした。私は私の前を、何の反応もしめさずに動いてゆく軍曹の背中を、ふしぎな生物を見るような気持で見つづけた。「軍曹殿、隊長殿がやられたそうですが」と注意したが、軍曹は振りむかず、「そうか——ほんとうかなあ」といって、歩度をゆるめずに歩きつづけた。

谷をおりたところに別の軍曹が腰かけていた。先任軍曹はそばへ行つて「隊長殿がやられたっていうんだが、ほんとうかなあ」といった。「ふーん、ほんとうかなあ」おうむがえしに相手は答えた。

彼らの会話は聞くにたえなかつた。私がそこを離れようとする、「みんなあっちへかたまつて、命令を待つて